

論 文 要 旨

現代台湾社会における親日感情の構築と日本の記号化—哈日族と哈日現象の分析を通じて—

張 瑋容

日本の旧植民地の中で、もっとも顕著な親日傾向を有する地域として認識されている台湾では、90年代後半に「^{ハ-}哈日現象」と呼ばれる日本のポップカルチャーの受容と消費が起き、その当事者である「哈日族」とともに研究者の注目を集めていた。これまでの先行研究では、哈日現象は親日傾向と関係づけられ論じられてきたが、両者間の断絶が問われておらず、哈日現象の最も重要な特徴としての「<日本>への愛着」——ここで言う<日本>とは、主に消費やメディア視聴を通じて受容されるイメージ化された日本、及び日本を想起させる諸記号の総体を意味する——は親日的な社会文脈の中で自明のこととして扱われてしまう。そこで、本論文は日本のポップカルチャーの消費・受容の過程を通じて日本の存在が記号化され、ローカルな文脈に流用されて意味付与されるプロセス、すなわち「日本の記号化」のプロセスとその系譜を浮き彫りにし、哈日族の「<日本>への愛着」を現代台湾社会の親日感情の構築に位置づけて分析することを目的とする。

本論文は三部構成になっている。第一部「哈日現象の系譜」では、まずは哈日現象に関する新聞記事の考察と先行研究の検討を通して、哈日現象の展開と変容を概観する。哈日現象に関するメディアの注目度は2001年にピークを迎えた後に急速に低下していったが、<日本>のローカリゼーションと日常化、及び日本のポップカルチャーの受容の多様化は新聞記事にも先行研究にも示されている。この結果を踏まえ、次に哈日現象を醸成する歴史背景を遡る。各時代の国内外の政策から台湾と<日本>の関係を考察した結果、植民地期から哈日現象まで、台湾が経験した「日本化」、「脱日本化と再中国化」、「再日本化」の変容は生活のあらゆる側面から国家のイデオロギー構築までに現れる、ということが判明した。この過程において、「日本の記号化」は何幾度変容し、<日本>が象徴することも多義的になっていったが、外省人、本省人、哈日族など想像の共同体を強化・区別する象徴として捉えられる系譜が連続していった。また、戦後戒厳令下、<日本>要素が全面的に排除されたが、アンダーグラウンドの回路で温存されローカライズされながら、政治性との関連が希薄化していった<日本>は、日本のポップカルチャーへの積極的な受容、消費と享受、及び<日本>のローカリゼーションで特徴づけられる哈日現象の出現につながる背景となっている。

第二部「哈日現象の現在」では、フィールドワークとライフストーリー調査の結果に基づき、哈日現象の実態のマクロとミクロの側面を述べる。まずは、哈日現象を代表する消費地域「台北西門町」及び「台北地下街」でフィールドワーク調査を実施し、この両地域に存在する<日本>記号の観察と記録、両地域を訪れる消費者の行動の観察及び関係業者のインタビューを通じて、<日本>が構成する風景を考察した。その結果、日本のポピュラーカルチャーの商品化とローカリゼーションを基盤に構成された、

一見異種混淆の消費空間において、アイドルやオタク文化を中心とする哈日族の欲望が掻き立てられるとともにジェンダー化された空間的秩序が浮き彫りになった。次に、エンターテインメントとオタク文化の受容と消費が盛んな哈日現象の特徴に基づき、アイドルやマンガ・アニメファンの哈日族 11 名のライフストーリーについて、哈日族としての生活構築の経緯、〈日本〉に対する欲望化のプロセス、日本の商品（とりわけアイドルやアニメグッズ）への執着、及びアイドルやキャラクターへの愛着を中心に述べる。

第三部『〈日本〉への愛着』の体系では、哈日族のグッズコレクションとそれらをめぐる言説と想像の分析を通して、哈日族の「〈日本〉への愛着」をより具現化し、さらに現代台湾社会における「〈日本〉への愛着」を構造化することを試みる。グッズコレクションとそれらをめぐる哈日族の妄想と言説を吟味することで、アイドルやキャラクターへのセクシュアルな眼差し、及び〈日本〉を進歩と結びつける集合的な想像が絡み合う、〈日本〉記号と象徴的意味で構成された重層的な神話体系が浮き彫りとなった。さらに、〈日本〉への眼差しを現代台湾社会に位置づけて構造化し、台湾の国家発展と本土化意識構築の過程における〈日本〉の他者化の神話体系を分析した。こうした〈日本〉の他者化は、一方において、ポップカルチャーの消費世界、日本との歴史、政治、経済関係の中で〈日本〉を支配しようとする欲望から行われる、〈日本〉のジェンダー化が見られる。他方において、異なる時代背景と族群の共同体意識ないしナショナル・アイデンティティの構築に、〈日本〉は一貫して重要な他者として媒介の役割を果たしてきた、という系譜が明らかになった。その上で、現代台湾社会に生きる各世代の〈日本〉への眼差しの重層的な立体構造を、Joan W. Scott が指摘するファンタジーの概念で解析した結果、持続的に形成されつつある〈日本〉をめぐる集合的想像、人々の〈日本〉への複雑な眼差しと多様な欲望、及びこれらの総合構造の持続的な形成過程の先に浮上する〈日本〉に基づいて描かれた理想像、という重層的かつダイナミックな「〈日本〉をめぐるファンタジー」の構造が指摘された。

台湾の現状を起点にし、それを醸成した歴史背景との断続的な関係の系譜を明らかにした本論は、哈日族の「〈日本〉への愛着」の重層的構造及びその動態的かつ持続的な形成過程を解析し、ファンタジーという次元において、ジェンダー、ポップカルチャー、ナショナル・アイデンティティが交差して相互作用しているということを示唆した。